

アルトー論から「器官なき身体」まで

宇野邦一

1

アントナン・アルトーは三十歳前後に少なからぬ数の散文詩を書き、それらを集めた本を何冊か出版している。詩といっても、それはかなり異様な表現であった。『神経の秤』(*Pèse-nerfs*)というような本のタイトルが示すように、それは彼自身の心身の危機的状態を精査し、物理的、生理的に解析し、つぶさに計測するかのような実験的思索であり詩作であった。

フランスに留学し、ランボーの詩について修士論文を書いた後、私はこのアルトーの詩的テキストの硬く不安な、激しく脆く、音もなく叫ぶような言葉に強く引き付けられるようになった。ちょうどその頃通い始めたジル・ドゥルーズの講義にも、私はかつて接したことのない思考のドラマを発見していたのである。そのうえドゥルーズは、いくつかの書物でアルトーについて書き、彼自身の哲学的問題の核心に介入する試練として、アルトーの思考と身体の実験を読み込んでいた。

そこでドゥルーズに指導を申し込んでアルトーについての論文を書き進めることになって、まず始めたのはアルトーの詩的テキストに見出されるあらゆる主題と問題を列挙しながら、アルトーの思考の「原石」のようなものの形を作図する作業だった。アルトーのその後の演劇論も、ローマ帝国(『ヘリオガバルス』)からバリ島、メキシコにまで広がる人類学的探求も、そして晩年の「器官なき身体」をめぐる壮絶な思索と実践も、この「原石」から展開されるという予感を私はもつようになった。

こうして若いアルトーの散文詩を読解する第一章を書いてドゥルーズに提出したところ、その感想も含めて、それからの論文執筆にとって指針になることを記した一枚のメモをドゥルーズからわたされた。日付はないが、それは1977-1978年のことだと思う。

その後 *Artaud et l'espace des forces* というタイトルの博士論文を書き上げてパリ第8

大学に提出し、審査を受けるのは1980年6月のことで、この論文を少しずつ日本語で書き改め1997年5月に『アルトー——思考と身体』として白水社から刊行した(2011年新装復刊版)。ドゥルーズのほかに審査に加わったのは同僚の哲学者フランソワ・シャトレ、ルネ・シェレールと、私の知己であった英文学者ポール・ローザンベールだった。

2

ドゥルーズのそのメモに何が書いてあったか、次に翻訳しておこう。

はじまりとして、よい仕事だ。

1) 初期のテキストを重視するのは正当であるが、それをあまり展開するべきではないだろう。思考を脅かすのは空虚であるよりも、空虚を生み出す力であり、敵対的で有害な力なのだ。A〔アルトー〕にとって記号は根本的に力と関係する。彼の問題は、形ではなく力という用語で提起される。あなたはそう述べてはいるが、もっと強調すべきだ。

2) あなたの仕事の本質は、Aにおける異なる諸力の研究であるべきだろう。たとえば石(それは特別な力をもっている)、息吹、音……などだ。アルトーのいろんな時期を区別しなければならない。たとえば思うのだが、映画はある時期Aにとってどんな力を結集するものだったのか。

3) おそらく本質的な書物は『ヘリオガバルス』である。詳細に分析するべきだろう。とにかく混交を避けて、力のタイプを区別してアプローチしなさい。

4) Aがシニフィアン―シニフィエの主題と何の関係もないことをあなたが指摘しているのは正しい。彼にとって記号とは、分節言語ではないからだ。

これらの簡潔な指摘は確実に私のアルトー論の酵母になって膨らんでいった。

3

「器官なき身体」はアルトーのテキストに出現し、やがてドゥルーズとガタリが『アンチ・オイディプス』で取り上げて、何か途方もない〈概念〉になってしまった。ところで晩年のテキストに書き記す以前にも、アルトーは確かに「器官」を排

C'est un bon travail, qui part bien.

Vous me raison d'attacher de l'importance aux textes du début. Mais il ne faudrait pas leur donner trop de développement. Ce qui menace la pensée, c'est moins le vide que des forces qui font le vide, des forces hostiles et malfaisantes. Le signe, pour A, est fondamentalement lié à la force. Les problèmes pour lui se posent en termes de forces, pas de formes. Vous le dites, mais pas assez.

29 L'essentiel de votre travail devrait être l'étude des différentes forces chez A. Par exemple, les pierres (qui ont des forces spéciales), les souffles, les sons -- etc. Il faudrait que vous distingüiez les diverses périodes d'Artaud. Par exemple: quelles forces le cinéma semble-t-il à A. pourrait mobiliser, à un moment.

30 Peut-être un livre essentiel sera Heliogabale. Il faudra l'analyser de très près. En tous cas, procéder par types de forces, en entant les mélanges.

49 Is avec tout à fait raison de souligner qu'A. n'a rien à voir avec les thèmes significants-signifiés, puisque le signe n'est pas pour lui du langage articulé.

撃するかのような言葉を記している。たとえば最初の散文詩集『冥府の臍』ではこう書いている。「細かくほぐされた真の虚無、もはや器官をもたない虚無 (le néant qui n'a plus d'organes) を知らなければならない」。この「虚無」は「阿片の虚無」でもある。アルトーは早くから心身の異様な苦痛や麻痺をやりすごすために麻薬を服用していた。そしてやがてローマの少年皇帝をテーマにした小説『ヘリオガバルス』では、「もろもろの器官をしきつめた道を通して神のほうに上っていくことは難しい。これらの器官はわれわれが存在する世界にわれわれを縛りつけ、その排他的な現実を信じさせようとするからである」(ガリマール版全集VII、p. 51) と、またしても「器官」なき「道」を提唱するようにして書いている。

器官は、拘束であり、排他的であり、アルトーは確かに一貫して器官なき身体、器官なき生命をめざしたようだ。それはまったく不可能な主張であり逆説的概念であるとはいえ、だからこそ独自の意味があり、様々な思考や実践を触発してきた。

すでに『アンチ・オイディプス』では資本主義の「資本」が「器官なき身体」に対比され、この概念はまったく生物学的身体を超える社会的、歴史的レベルに拡張されている。器官 *organe* は有機的 *organique* であり、組織 *organisation* でもある。それは確かに、ただひとつの定義や実例に収束され還元されるような用語ではありえない。

いままったく仮説的に「器官なき身体」とは何か、リストを作ってみよう。それには無数のヴァリエティがある。そのように多様でないとすれば「器官」を排斥したことの意味がない。このリストはまだまだ乏しすぎるが、もちろん何でも受け容れるわけにはいかない。

1) それは身体のある状態にあたる。ドゥルーズ＝ガタリは、『千のプラトー』の第6章で、薬物中毒、アルコール中毒、マゾヒズムなどを、それらの危険を指摘しながらも「器官なき身体」の例としてあげている。そもそもある苦痛の状態さえも「器官なき身体」でありうる。苦痛とは器官そのものの受苦的、脱自的な体験である。

2) それはアルトーが「残酷演劇」の例としてあげたバリ島の音楽とダンサーの身体のようなものでもある。力の震動を抽出し開放する技法が、いつも目標とするような「器官なき」生命の状態があるだろう。東洋の身体、経絡図、気の流れ。タラウマラ族の儀式。

3) それは〈資本〉に象徴されるように、敷居や境界を固定しない流動的な循環や散逸や連結の組織であり、そのような集団性(群れ)のこともである。そして貨幣

とはもちろん一種の「器官なき身体」ではないか。

4) 電子メディアがもたらした組織（ネットワーク）は器官なき身体でありうる。そして記号、イメージの流動性や操作性は、非身体、非物質のレベルに、たえず新しい器官と器官なき身体を生み出すだろう。ガス状、微粒子状の組成、光の身体が次々生み出される。そもそも記号にも、言語にさえも、そのような器官なき身体レベルが含まれている。映画、映像の生み出した器官なき身体例も数々ある。

5) 異種交配（ランと交わるスズメバチ）は、器官を結合し交換しているという点で、すでに器官なき身体を形成する。

6) 卵、形態発生以前の生命は、文字通り器官なき身体である。

7) そもそも身体を、細胞や微粒子単位のレベルで、流動し変動し、たえず触発し触発されるものとするなら、器官とは単にマクロな認識のとらえたマクロな形態にすぎない。スピノザの身体のイメージを想起すること。

8) 全体、統一をたえず斥け、部分に還元してしまう身体、これは全体と部分の一定した階層的關係に反する論理でもある。

9) 論理的レベルの「器官なき身体」は、ドゥルーズ＝ガタリが述べた「離接的総合」の「肯定的、無制限的、包含的な内在的使用」によって成立する。「あれか、これか」の代りに、「あれであれ、これであれ」が登場することになる。分裂症者は、男性にして女性であるのではない。彼は男性あるいは女性なのである」（『アンチ・オイディプス』河出文庫、上巻148頁）。

10) ひろがり（外延）ではなく、分割不可能でたえず変化する度合い（強度）としてとらえられた身体。

11) あらゆるカオスは器官なき身体でありうるが、それがはたして身体を形成しているかどうかを見きわめなければならない。

12) 器官を形成する生命の過程があるが、器官が生を決定するわけではない。進化論によれば、生物の進化は確かに器官を変形し超えてゆく。

13) 生命がそもそも「器官なき身体」であるなら、死の次元にさえもそれはある。死者、死体、ミイラ、死霊に託された「器官なき身体」。

14) 統合失調症、パラノイア、ヒステリーなどの「器官なき身体」。シュレーバー博士、ニジンスキー、フランシス・ベーコン。

15) 動物、植物、昆虫の器官なき身体、怪物という器官なき身体もある。

16) 蜘蛛の巣と蜘蛛を貫通する波状のひろがり（ドゥルーズ『ブルーストとシーニュ』）。

17) 流れ、水、風、音、ノイズ。水墨画、ターナーの光と渦。

18) 視覚よりも触覚、線（輪郭）よりも色彩のほうが器官なき身体にかかわる。

19) くだらかな有機的線が凝固し、そして震動し加速されるとき。北方の装飾。ケルト美術。あるいはゴシックそしてイスラム美術。

20) 金属、石、鉱物は、器官なき身体である。『ヘリオガバルス』は隕石の落下から始まって、やがてローマに介入する器官なき身体のものである。

21) 諸器官の間、間隙、亀裂は、すでに器官なき身体である。視覚と聴覚の結合が解かれるとき、器官なき身体が出現する。

22) 性倒錯、両性具有、ある種のエロティシズムの身体。別のエロティシズムはただ器官に執着するばかりだとしても。

23) 俳優の演技を中断させ逸脱する人形の身体（クライスト、ゴードン・クレイグ、カントール）。

24) 形態ではなく力のタイプが問題である。これも器官を超える生態にかかわる。

25) 脳はそれ自体あくまでも「器官なき身体」のような器官である。つまり器官的でない器官である。ドゥルーズの80年以降の書物に、ときどき現れた脳のイメージに注目しなければならない（『フォーコー』、『時間イメージ』、『哲学とは何か』）。

宇野邦一 | うのくにいち

立教大学現代心理学部映像身体学科教授 | 現代思想・映像身体論